

朝夷巡鳴記

第三編

卷一



13
704
11



曲亭馬琴著



門 第 15
號 704
卷 11

朝夷巡島記第三編

明治三六年
十月九日
購求

歌川 豐廣画 文金堂叟兌

朝夷巡島記第三集叙



稗官小說。述作之巧。虛實紛紜。使無如有菜
唐自恣。寔無端倪也。余少游戲翰墨。世人悞
認。以為新奇。書肆懇請亦隨。至於是觀變化
於流俗之際。而弄筆費紙。寫其風韻情致。以
老於閭巷。蓋以此不睡不食。苦心於案上。又
以此釣名微利。以畜數口者。有年矣。其所為
豈足取笑於大方哉。質弱多病。素不勝擔薪。
偷食之民。不得已而爾也。雖然。漢藝文志有

明長三編卷一

稗官錄閭里瑣言云爾自是以降街談巷說雖史官有取焉風俗僥醜好奇走新至於今和漢新研之書什而小說居八九坊賈捷利者由時好以揣刺也昔人謂藥八百八味而能毒相半矣是言亦可以譬於野史稗說其談詭譎雖則有誣世之害又不為無醒蒙昧之功也其勸懲主治也詭詞猶藥毒也自非醫愚俗之神者豈可得攫採以施於人耶昔嘗有其人姬周老莊印度釋氏是已世代迥

降至元明之際施羅兩才子出竊因循道釋之善巧盛建赤幟於傳奇中後之稗官者流剽竊摹擬習而不及焉猥褻呈媚而勸懲彌遠矣所云若僧尼孽海金瓶梅隋史遺文肉蒲團諸書宣淫導慾莫甚於此又不可使聞於婦幼頃朝夷巡島記第三集藁方成書肆文金堂請嗣梓因述此事代序以自警焉文政改元立炆前一日題于飯顆山前菰淵北畔著作堂

菰笠漁隱



朝夷巡鳴記全傳中輯第三編總目錄

第廿一條 ちひのやとのあぶらのいと 待宵小姐蜘蛛 ちひのやとのあぶらのいと 誓的垂柳絲

第廿二條 あせのやまのさかづき 賽俳優名簿 あせのやまのさかづき 月下翁赤繩

第廿三條 とよひのやまのさかづき 引友小松宿 とよひのやまのさかづき 吻途轍江鮎

第廿四條 やまのやまのさかづき 山院古塔婆 やまのやまのさかづき 駒形老淫婦

第廿五條 あせのやまのさかづき 色界孀婦鳥 あせのやまのさかづき 欲海和尚魚

第廿六條 あまのうらのむすのうらのあま 山神洞夜雨 あまのうらのむすのうらのあま 信夫館隱篋

第廿七條 いりせのひのひのさかづき 鸞鳳日蔭花 いりせのひのひのさかづき 副將晦之月

第廿八條 ひのうらのさかづき 平泉役敗北 ひのうらのさかづき 假賢相赦書

第廿九條 あせのやまのさかづき 夷使沐猴弁 あせのやまのさかづき 衆兵大夢覺

第三十條 あせのやまのさかづき 嵐庭連理木 あせのやまのさかづき 遇春羽生梅

此編第二十一條以下為中輯二十條以上為初輯其總目見初編及第二編卷端繡像之右

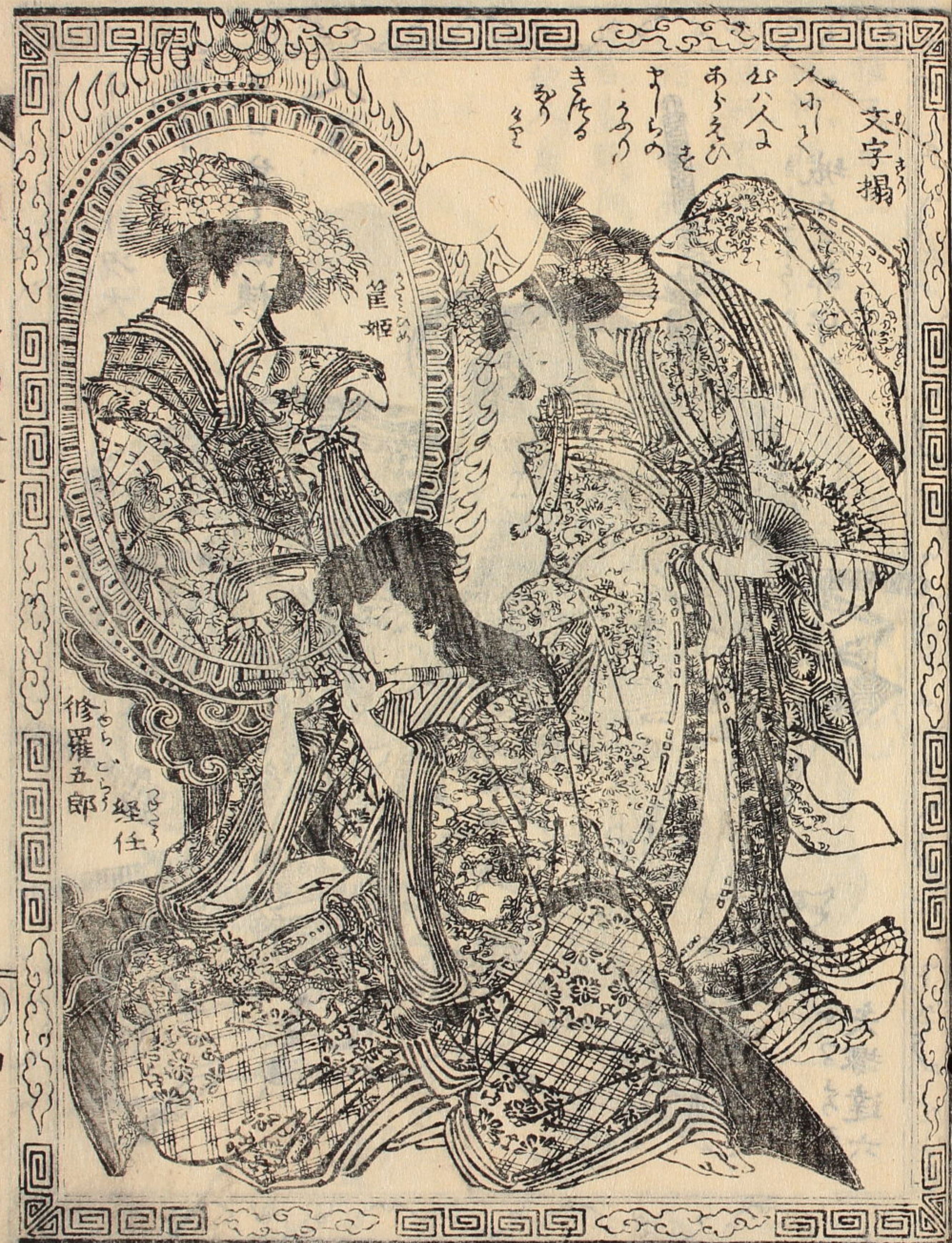


賽女

馬糶標吉郎

煎鍋の尻もまぐれつ
 くらりくらひはまき
 との
 峯上よあけ夜の鹿

黒萩



文字揚

人の中
 公人よ
 あふえひ
 ずらの
 うあ
 まはる
 かり
 とき

雀姫

修羅五郎 經任

小惡勿作况大
惡乎
天口兌之默使
人言



城白三郎守詮

矢塚達六

推了车子
過河提了
油瓶買酒
錯只錯在
自家難向
他人角口

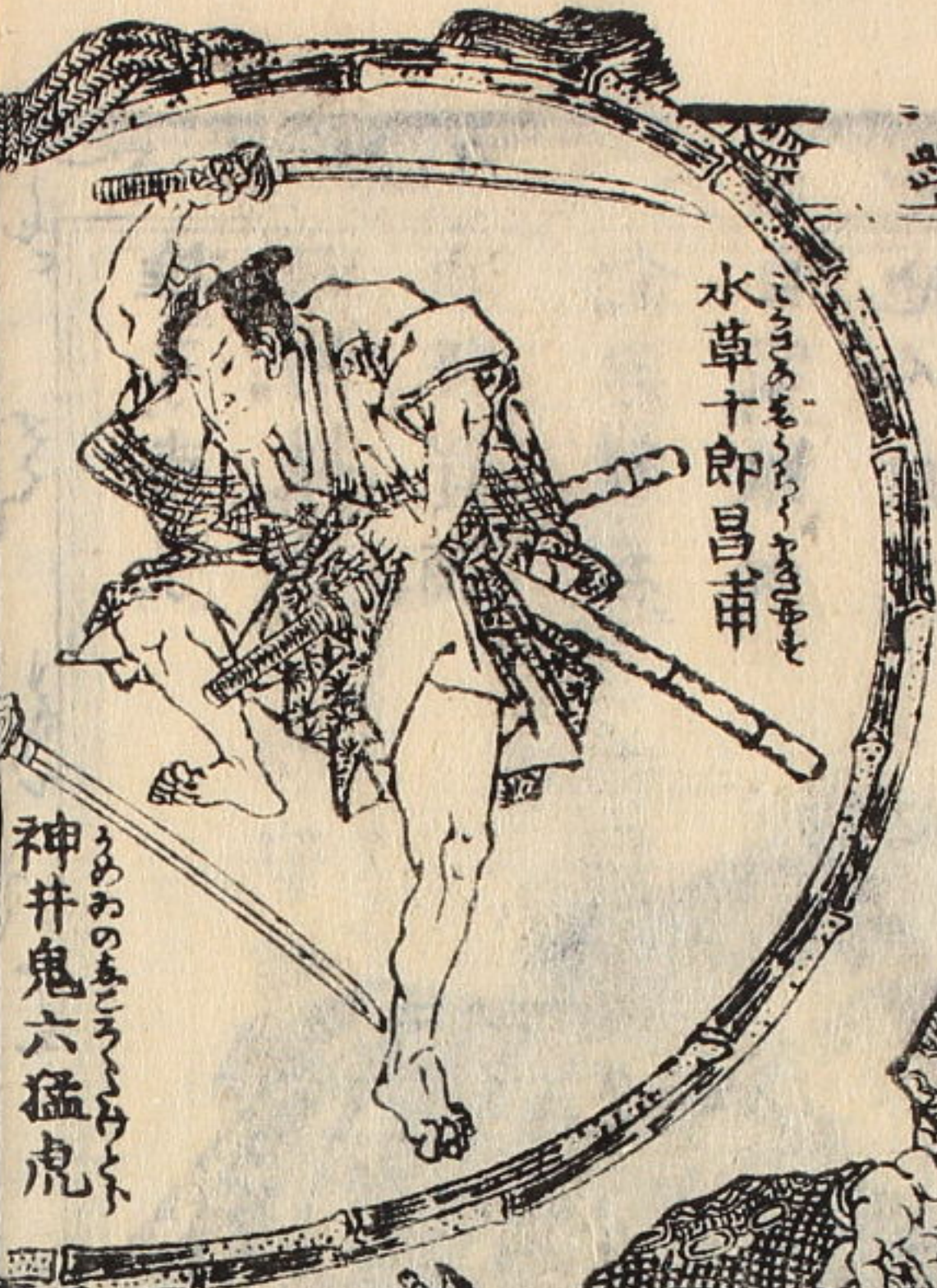
足利左馬
源義



蘇塗
鶴東二
暴道

いよのこ
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた

信夫莊司元暗



水草十郎昌甫

神井鬼六猛虎



鱒貫九郎

水上浮
萍隨
浪去
何分
南北
與東西



鳩江

婿竹

列傳姓氏畧目

初編起元曆元年正月
建仁三年二月

全傳 朝夷二郎平朝臣義秀

將相 將軍源賴朝

將軍源賴家

源義仲

將種 源範賴

駿河前司廣綱

足利左馬次義兼

六條藏人仲家

吉見冠者義邦

武臣 和田義盛

足立盛長

北條時政

北條義時 大江廣元

相摸太郎泰時

内田三郎季吉

稻毛三郎重成

結城七郎朝光

海野太郎幸次

狩野从祐茂

宇佐美三郎茂光

岡田冠者親義

刀野備杖照時

信夫莊司元晴

多賀藏人光仲

家臣 江籠口廣通

大夫屬重能

橋太左衛門尉高保

梓治部丞有友

江之二廣光

當麻太郎武弘

湯嶋木二進基勝

伊庭捌九郎敦俊

磯貝十郎員幸

名栗節平元廣

矢矧二郎景茂

五十良子三太季宗

菊川萬作良忠

春日戸舟九郎綱道

龜堀圖内

龜堀小頓太

龜堀小珍二

間中隼人守直

下河邊小三郎高吉

八嶋室平師任

腰越獸六郎

城戸三郎守詮

水草十郎昌甫

高階兵衛師勝

糠田八作重正

海老尾加世丸

蟬貫九郎

江小二

馬兼標吉郎嗣忠

浮浪 健田秀作

義夫 浅江豊六

躰一三

稻向判五

農夫 苗四郎

藁二郎

引太郎

婦人

尼御臺如實

幡多前

菖蒲老屋

且見姬

笹姬

韞繪

牧方

菜手

友鶴

淺良井

判五妻

梭枝

鳩江

燭竹

鈍佛

黑菽

文字搦

浮屠

筠長老

卜繕

賽玄

廝役

根奴

莖平

切平

決奴

悪棍

山主魔平太

越赤熊太

夷守水六

臭水沼太郎

三九二中太

逆賊

修羅五郎経任

刀野太郎時夏

蘇塗鶉東二暴道

神井鬼六猛虎

鐵盾矢藤五重連

珍浦五十五六方相

早蠅五頭平

矢塚達六

右初編より第三編小至る四編以下新よむと姓名八追てこれを録すべし

朝夷巡嶋記全傳第三編卷之一

東都

曲亭上人編輯

中輯第廿一

待宵の小姫

誓的乃垂柳絲

却説媼子并平八雷上動の名りふ長羽透羽の箭を合とて。且見姫の
寝所のまゝ。うち衛をを格小夏の夜まれば短くて丑三時ありに
けり。時ハ卯月十日あり。甲夜ハ半月魂の傾く新いんさども初社鶴
音けり。南の窓に珠の隙隙漏る風は涙ふも。蟬燭は照りて。糸練掛し
蟾子の宿ともええてみやびし。浩如寝所のかま姫之魔れぬひぬと
いふ声間近く。やえし。井平八今こそと。合する矢ふと結んで。弦音高く
うち鳴じ。古実。従ふ墓目の法形のどくは。執行ひつ。二世の浮沈にあり。

正の限り女子やてのあはれた。のとも笑まへばせむいと哉遍か。ゆよ
 ひとを寄めても鬱結釋ぬ縁糸の奈まき苦の物とひ下枝の黄葉色よ出く。
 峯上の藤と三音ぞぞ啼く恋もやまると同くちまては病の床は婦しほのあは
 なるりある歎きまて。いつぞまのびへえぞまのあはれまてまてまてまてまて
 夢のいさよのひけよのまゝだ。よあまの地へ来させし物人の窓の明暮よ。
 胸窺しうり忘られぬ面影まをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまを
 娯しれ狩衣の露の情を掛烏帽子。下際目も晴衣の晴ぬる雲の答
 めるで雨夜の月とえまをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまを
 曉てるせし紀の冥守がゆ束のらも彎るまをまをまをまをまをまをまをまを
 今まよ外へ翦夫ははまもま。竭ぬあまひの八百目もく。濱の真砂子よ敷
 めるぬ女浪男浪もあまのぬ行滞の泡と沸るまをまをまをまをまをまをまを

へき。やよ喃くとも口説く。声ハ口隠る練の被衣よ秋ハ見えねども。
 尾差が袖よ風幾ぞ。斐よ漁縁る鳥の紫のうらみある叢蔭よ屢啼く
 鳥のまのびあへて友あび求食風情あり。色好この男児ありせは汚し
 水津は舟のりみとらへき時宜あらねども。美人をうんとも夜叉の如く。
 情を秘めめ欲を誡め。色よ恋りぬ大丈夫の銀金尺此も動がむ腹
 たく。こよ声をぬり立みまて。かたはらん奉動怪。かると成うけぬらぬめ
 うね菅蒲の尾公のおん憑も。眼も路のるまにむん物の怪と恋ん。あ
 墓目よこそ候。くれ恋とまん情とまん僕まよか知るこころの故多し。
 横遣て出んとさる紙又。田あ。その情を。おつ。い。か。ま。ぬ。の。紙。の。ま。ま。の。
 和ら。い。ま。い。る。ま。ん。い。ま。の。後。は。願。事。の。か。ま。の。ぬ。と。死。の。存。命。て。人。不。
 面をよんね。と縁て覚期を。そゆる。せめておん身が。又もて死を賜。といひ

あへど刀の鞘より身を懸て人の井平膝で推禁めたる肉物中狂ひ多しと
うらうらなればおの惑ひをばめて某がわらうにと派せぬ人恋は貴族の
差別有り或は思念の外といひて又好むもの常言の世は解のこき
事おはれぬ。それとも切つて死縁ありあが結びもせん君の正しく
源氏の上掲廣徳朝臣のちん女児槐門貴族の屏中よりあをせらるるべし
ものか匹夫は惑ひて胸隙を續り藩を踰りやそれこそおんこのまじだ
け又程の為あもつらふと恥辱なれ某城は下司あれども義の為あき
命を惜ど仇ある恋は連係せられて徳頸別らとんのか後までも怒るべし
奇平不便と云ふはさく放還をせぬへこのふひ彼女と辞を弾て論
てもいひあへてはなかり候は漂る朝よと掛るまに身を倚て扱
たかえんと狂ひぬるが奇平殆どあゆ一暮目のらも合あて引つ扱れつ

争ふお外面は窺ふ人あり紙門を視とひくそそ。奸女淫婦を傳めよ
と烈し声は奇平の吐嗟とたくりえくまはのの行ゆく廣綱朝臣
長袴の裾蹴くして背は直躬と立ちぬ左右は西老臣間中車人守直
下河邊小三郎高吉紙燭を兼て墮るる且見姫の又君の声音の素より
あつひびく紙門は遠ひさく涙やや面あやと衣をぬぬく引被るは院
はけはる奇平の暗がぬものが燈を起たうやく愧て頭を擡得され廣綱
怒る言を激しおん奇平は既に骨相書をもて索るる罪人ありん
吾祖母の尼憐にて墨染の袖りと撞ひ下よび去てかへり来つれども
かゝぬおん慈愛の再生の恩値遇の福ぞの方さるる身を偶せて畏り
をふとよ何ぞや且見姫は懸相して奥より瀧ひ入り膳アは家の重宝
雷上勤のら兵羽水羽の翁を盗とて姫を伴ひきてんとさつらうを親狗よ

身を噬るといふ世の常言の如く人憎むも母恋と飽ぬ嗚呼の
白物なれと罵る人の并平後頭を擧げ縁由を如召さんばおん疑ひの
るこそあらぬも匹夫も亦志氣あり奸夫盗賊といひまへはよも死に辱す
いへばさへまじしやどのの成す釋りん暮ぬの某身の暇を多し加賀乃
小松よ赴きて吉見冠者を索しかるもさへみか粗詰て竟も得遣はる
其知事も被知すもそが骨折書を掛られて穿鑿嚴重のけしは聖時
露命を殺入る為に藍玉院に立かへ再び尼公の見事よ入りの暮目の
仰ぐもこの姫ごの物の怪を禳せんとの所ゆゑおれも敵上野の五十保の
温泉は浴せんとして赴きぬひのけ家臣達も敵は扈後。或は遠江に赴きて
果敢ともたれりのなせだ汝を頼むと代交るれ仰をきく固辞をい
かど。御懇は瑜一のへ終に固辞あはせて。御導者は然りと申夜より

あくまのいとも能もあく徳もあつた牙の及ぶ事ありあはれ頼政卿
より御相傳あり候と傳聞く雷上動兵羽透羽の弓箭を借らばと
物の怪の鎮らじとてひよびに君は且くを受ゆひも。おん疑ひを釋んと
あへば。びびりて尼公に問せり分明よりんと。いれもあへば廣徳の呵と冷笑ひ
その汝亦が尼君に欺きたるあぞあへんぞ。これ五十保は湯治して
十日のあつたの日をかきし。奴隷や。また見女輩。苗も。させんが。あつた
ゆとま。く。俄頃。か。つ。今宵亦。中集人守直も。遠江より。取著せり。
志く。い。宿所。の。為。件。あ。ら。は。ら。ふ。た。事。の。と。あ。れ。ば。竊。小。竊。の。目。見。が。臥。房。ふ。
密夫を捕ても世の向あつた親の恥辱。い。ろ。よ。愉。と。い。せ。ど。む。じ。の。廣。徳。
あ。へん。才。の。教。と。ぎ。奴。を。ら。る。あ。ね。ど。深。拵。得。失。の。思。を。離。ま。て。羽。生。の。宿。ま
世を避る。今更刃は血らんと亦は。愉。と。い。せ。ど。む。じ。の。廣。徳。
あ。へん。才。の。教。と。ぎ。奴。を。ら。る。あ。ね。ど。深。拵。得。失。の。思。を。離。ま。て。羽。生。の。宿。ま

向べし事あり。よるゝと来よと叫びうけて書院のかゝる出のふ。間中
 下河辺の両光堂の并平が海よりある。翁を念ひうと引提つ。犯人を推立
 せりて。おん前より牽居り。當下廣徑の弓翁とよくと取らせ。又并平は
 うち對ひ。汝且見が物の怪を禳ん為よこの弓翁と尾公の借利せよ。よ
 そこののり実あるが相傳の縁故ら翁の名目神あるよとよくとよりのの
 所為あるん。よとよりの弓翁を借るとも要は。竹の故は雷上動兵羽水相と
 名はひも。疾しん笑んと膝を進めて語りあり并平の畏りて袖うた合せ。
 ここのら翁の度實を未熟匹夫の生才学よ竹での覚期也よとよりの
 弓翁の頼政卿紫宸殿の母よりなく。怪を御射むりのひと。昔落を
 よよぶあて名ら翁の威徳を借ん。とよひのよとよと陳しやせの頭を
 うち掉らひありわじ傷るん。よとよりのが汝がしよ所悉皆虚言と。

いらぬぬの歎と謹めへの高吉守直左右。謙退辞讓も言ふとよる。
 才を惜せのふとよと。よるゝ外外よと。同せのふのふらあめ。茶の
 るふと。翁其并平沈吟し。小人罪あり。教王を抱と罪ありと。僕が
 事ある。おんかぬおん弓翁を借るとよるゝと。おん疑也一十月せ。
 孰は腹を路のほし。よとよと。且よよと。汝よりして笑をよと。某深念を在
 とら馬の師匠よと。よと。弓の原その形を月よ表とこれ陰し又
 翁を刺ひく。彎とこれ圓すて陽と。この時ふと日に表せ。陰陽二よ
 相感。激して遣ら弓矢の功。摘南山の雷のご。雷の陰陽二氣の渡
 弓翁の徳もよと。よと。よと。汝周易を考ま。雷はより動くと。此竹木の
 崩牙。混虫の出づ。よと。雷水解の二月の卦なり。解の散る。釋と屈する
 のよと。伸び替なるものよと。用く。解の時懿る。我君子のこれよと。

去りて椒花女壽令竭人と云ふと云ふ所の牙子と索るふ遠く日本
 國あり。撰津守光光をあり。一日光朝臣假寐の夢の中椒花女
 忽然と天降りその父の事らるる由未と巨細を告ぐれば夢を
 ありといふとありの夢へ覚る。頼光四下をみる件に弓矢備
 在り頼光これを獲てその射藝養由基より方なりと。光光を
 頼國へ傳へ頼國を道と頼國を傳へ頼國を道と仲政を傳へ仲政を
 頼政を傳へ頼政の子孫の相傳あり五世の心を重宝にけり頼政の
 弓矢の射を鶴を怪鳥を射て隕る名を海内は揚るひと。か
 らり傳へると
 あり。老くれども佛法を中國に傳へず。漢の明帝のとき
 東周戦國のときいふと。養由基を以て文殊菩薩の化身と
 いふ。甚不審。且養由基の楚の共王の臣あり。晋楚の兩軍戦ふ

と云。養由基ハ北の矢追ふ。乱矢は射殺されり。渠が七頁の齡を
 たりしといふ。いふ不審又その女兒椒花女が事。唐山諸史
 百家の書野史小説ももる。名彼りて無稽の流飲りま
 かの。此次よりては家説をけり。疑ひを釋け奉ひならん。と
 小藤と磯と拍吁奇才あり。此の壯伎當人多くはる。か
 らるの才歴は養由基よりと云ふ。世俗附會の流まん。輪
 へも。我邦史仁徳のとき。唐人も田宿祢あり。桓武平城
 嵯峨の三朝は仕る。坂上田村丸あり。近々同宗系家朝臣及保元の
 八郎為朝臣を。此の弓矢の事。異朝の弓矢射を慕ん。其
 其の流推て知る。兵羽水羽の夫の。其の流推て知る。其の



柳井外平の村

柳井外平



柳井外平の村

柳井外平

弓の初より。雷上動の名ありて。祖又三任入道雷水解乃
 卦。又本つた。この弓と遠く。一又バ弓人のそれを規模し。その
 孫と唱へ。らん志。その頼政と。あんなも子孫として。その祖の諱を
 物と。あんないと。憚り。あんなも。あんなも。先考仲細朝臣彼弓人。あんなの
 示。雷水解の諱より。雷上動と。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。
 雷上動と。同音より。その諱は。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。
 のあんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。
 たり。廣綱か。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。
 りて物の怪と。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。
 慚愧も。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。
 師傳を受けて。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。

む。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。
 公卿。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。
 義家。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。
 装束。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。
 の。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。
 天皇。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。
 陸奥。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。
 障礙。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。
 唯。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。
 瘡。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。
 さら。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。あんなも。

としの廣縁うち領さ既又汝が才あると。その学問の成り。いかに
 その技とえんぞ。汝この弓箭せめて。指を的と射て當り。淫奪の咎
 ありとせん。又その的を射外さば。汝が才ある様とす。淫奪の罪免す。此
 天の明らうとおぼやうぞ。そしくといふ。ばまき。ゆづら。弓箭と進上
 の。高吉守直さう。障子を開け。縁頗ある。兩戸残さず。鏢
 ひらげ。庭の塀と出る。その声も。漸くは。数ヤリ。て天の志。く。と。照小
 り。并卒の辞さう。た。く。弓箭を受け。檐下。お。か。ぬ。の。雨。難。願
 いとおぼやう。あ。れ。所。め。あ。れ。も。お。の。が。一。箭。の。的。答。と。り。て。お。ん。疑。ひ。を
 釋さん。願。か。ぶ。ぎ。僥。倖。あり。何。ぞ。ね。と。仰。上。の。廣。得。も。端。近。う。
 立。出。て。梢。と。瞻。仰。并卒。彼。処。の。柳。と。え。ん。ぞ。也。ひ。く。楚。の。養。由。基。の
 百歩の外。お。柳。葉。と。穿。と。い。ひ。傳。ふ。朝。戸。田。盾。人。の。鐵。の。盾。十。枚

わ。し。の。推。累。ひ。て。射。徹。し。う。皆。射。藝。の。神。あり。の。こ。それ。後。亦。そ
 至。下。ご。も。吾。指。と。的。の。彼。処。あり。彼。柳。の。梢。お。そ。北。向。う。衆。枝。を
 離。して。鐵。く。垂。る。弱。條。あり。こ。は。派。幹。より。一。尺。残。り。て。只。一。箭。よ。射。て
 落。せ。よ。ま。う。ん。あ。の。汝。が。あ。れ。は。様。傳。う。行。ひ。は。よ。ふ。潔。白。の。人。と
 お。の。り。ん。ご。せ。よ。か。と。扇。と。り。て。這。は。抄。と。示。し。お。の。并。卒。の。當。惑。の。匹。を
 聖。妻。時。傾。け。る。い。切。て。親。を。改。め。及。び。ぬ。り。と。ま。う。る。あ。が。推。辭。は。不。義。の
 奴。と。せ。ら。る。進。退。先。又。ゆ。ひ。ぬ。只。成。敗。を。天。に。任。す。運。を。試。し。ゆ。ん。笑。覚。ん
 あり。と。一。札。して。や。ら。よ。希。と。う。ち。刺。へ。下。河。邊。高。吉。の。間。中。集。人。と
 目。を。注。せ。并。卒。口。お。六。才。あり。と。も。七。八。十。歩。の。さ。る。こ。より。糸。多。く。柳。の
 條。を。射。ん。と。む。の。こ。あ。れ。晴。技。之。叶。へ。取。と。も。る。向。義。遍。由。辭。し。せ
 う。と。ま。う。氣。又。の。是。彼。面。お。顯。して。あ。ら。う。の。中。に。陪。と。う。ま。う。ん。が。母。軍。の

左右のくハ弯も護さぐ本貫信濃の祓坊の神社故郷近江乃
 多賀の神を心中は祈清く且く同じる月をひくは仰さぬ身を
 及して弓と満月の如く彎固め矢声をつけて丁と射る寃違はと抄多
 柳の小條を二尺強くて彈糸と射切らう條は上らう閃そ此の邊平
 高吉守直
 こまをえと。あつても声をつひ射らうく。とらう共小廻を披こく
 立かた。髪の後毛束をうやで。あふを立まば并平のら校とて小條を
 突立あふの氣を何ひたり。廣綱感嘆後かむ舊の如く退き
 媪子と。と召ぬは并平の何と志つ。且假山の母よりふりぬて箭を
 抜きらふ柳の小條を。とり添て進まさんば下河辺高吉の恭しく
 受取て束糸小毛を納め。間中隼人の柳の條を。廣徳よえせまあり。

主従頼小并平が射藝を譽て己ざりたり。かくて廣徳は并平を
 近く招けよせ。これ初らう汝をりて。一番量ありのくえん。えんた。
 久人を知ると。えん。えん。これと病く。口と亦其許は疑ひあり。
 どの時故は侍らう。又下野までの為侍らう。かむと。えん。えん。
 その罪ふあらば。さうとも力ありの。口あつてひひる。吉今うは
 多うり。辨俊や。牙の非を飾り。奸曲あつて賢者を誣斯のど。えん。
 亦まうと。えん。北條刀野ホが行むところと。悉非と。えん。えん。唯
 汝が。命と。悉と。がじ。い。虚実を。えん。えん。えん。えん。
 吉見冠者が跡を慕て。加北へ赴くといふは黙止らう。り。又。えん。
 正つべ。如此と。小謀りの。と。藍玉院小示。ま。して。えん。えん。えん。
 果して。えん。えん。墓目小假托て。且見が。色小。えん。えん。えん。えん。

乞權あり。えんば六韜の選將篇ふらふや。こと不言を以て。其の
 辞を觀よ。ことぞ六韜ふ辞を以て。りてその妻を觀よ。これに與るよ。
 間謀以その戒を觀よ。明白頭問ありて。りてその徳を觀よ。その
 使ふ財を以て。以その廉を觀よ。ことぞ試ふ色をりて。以
 その貞を觀よ。ことまは告る難をりて。以その勇を觀よ。これを
 解する酒をりて。その態を觀よ。この八徴備つるとは。賢不肖
 別るといふ。因て廣徳竊小謀く。はふ鳥帽子装束させ。茶干
 傳つらう希と。卒尔小備よ。ころ驕る否を觀ん為。これを
 誘ふ。且見姫か色をりて。動せ。その貞死や否を觀ん為。これハ
 五十保湯治ら。老堂もみふ在。ばといひ世の同謀をりて。戒を
 觀ん為。ら箒のる。実墓目の射法。彼と多く。此と多く。誘う同。ハ

明白頭問ありて。その徳を觀ん為あり。八徴の中四徴を行ひ。竊よ
 其辞を試ふ。義服小愛と。重畧をりて。誘ふ色を觀ると。其の
 巧言艶語は。動さん。廣徳が同事。毎小響の物小應と。其如く。
 辨舌泉の流る。に似たり。加以百歩を隔て。柳の絲を射て。断ら。
 是も小考る。小難をりて。以その勇を觀ん。是も。今こそ疑心
 氷解と。され。和郎ハ宅小落。命の人追捕。嚴密ありといふ。とも。その
 罪中。あふりけり。然る。沢ひ。り。廣徳が。執念。亦も疑ひて。賢者ぞ
 陷る。や。て。欺詐の子を。彈世ハ。事を好む。小似れども。只その才を
 愛る。の。あまの。捨る。死。ひ。あり。悪意。りて。世る。あ。ね。ど。須臾。も。苦
 志ハ。余が。僻事。と。あり。けり。と。心。隈。多く。勸解。の。ハ。并。卒。ハ。廣徳。の。ま。を
 愛。の。小。戒。を。感。涙。を。禁。め。あ。む。い。ふ。人。の。言。葉。も。士。ハ。已。と。知。れ

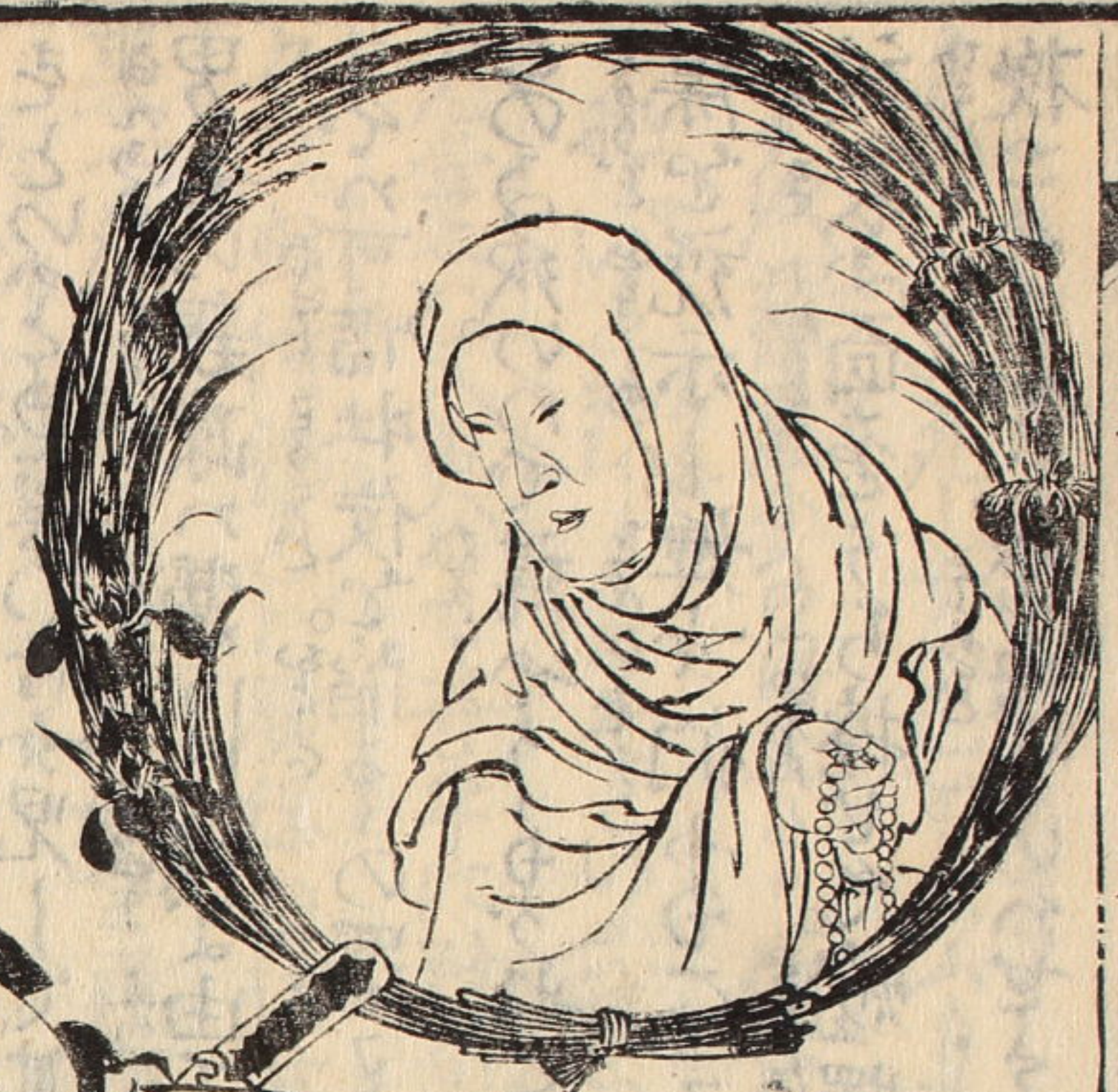
月夜三編卷一

十六

のの死に女に己をばつぐりの為小親るといへり某の狩場の雑子に
 慈恩ふる母生たり。何ぞめて報いせん宿世の中は値遇ある
 那いと歎くこそといふ誠の辞ふあられなり。當下間中下河辺の支
 老堂へ又更めて并平に對面。送る名氏を告智して久後までと契
 たり。武待流まが廣徳の復并平を呼び近づけ。既ふかう打釋て色
 果べたりのみぬ且見姫を再び見せしめ且見とて召喚は阿と恋ていそなる
 の衣裳の宵のまにては姫と小異なるも既月額刺さびいとぞうびる
 男子は小禮擡取り妍さ出て西老堂が次まをり彼はいつやと問ひつらんかう
 ても并平のいまごろをひびくもをわめと主従は笑く面をわたりける。

中輯第廿二
 賽能優の名簿
 月下翁の赤繩

中は廣徳の笑とちとをく彼男子を并平小指一は媪子の渠を
 認りや。彼奴が假名の且見姫真の海老尾加世九と叫まき童形より
 召使ふ賢かかぬと偽るべ才あけとも思ふもあはげ様樂せよとけ
 嗚呼のりの心。嚮おも説諦せしむ。竊小其許を成つるは婢女們をりて
 をといふとも。真の吾女見して其許を臥房へ誘してはこま淫奔を海るこ
 男女の親疎の憑がじ情は由て心動か詭の計も遂は真の密會とらん。
 こそは可惜社伎を陥るくの罪なあり。いそ其許をも陥らば且見姫も
 この死のいで得かうもがねと左往右来さひつ。さて加世九ふ如此こと
 謀を説示。婢女們あもころひさせと。彼奴且見が衣裳を被せ
 被衣小面をうら掩せて燈燭暗き臥房ふとせ。ころみく其許を
 挽とせとせ。密語をいせさる。げうのあはぬのこ。とその肺肝を



加世丸



らたのふみのまをひつるゆん玉也
太田の里乃秋のふれ月信天翁

加世丸



若しハ井平更さら小勢せう死しんで氣色けしき含くる額ひまを控あせめ、まをらうを
 用もちひらけハ自化まじの幸ゆきハ感謝かんしゃ不堪たふといハ加世かせ九進くしゆと出客人しやくきん
 昨夕よくハ古ふるたるさ。との限かぎりもこれ主命しゅめいいと憚おそり、いひま、空そら小兵こへいハ流ながの
 みる奥安積おくやすせきの沼ぬま生なる。蒲か植うふあぬ且見かつみ姫ひめ且見かつみを恋こハさめぬ。
 けハ見けんまの牽ひ出物でしハ物もの存ぞんあり、中なの姫ひめらハの名なとつらつりし淫婦よんぷが
 首くび取とていと長ながた袂たもと小隠せういんする。假髮かみの髻むす結むす搥た廻まわといハ実まこと檢けんと
 さい出いでせハ井平せいへいハ堪たらね。笑わらの中なか小換せうか投なと廣保ひろたかあり、まてかせ丸まるハ
 汝なんぢ癡ち飲い今いまハ様さま樂たのせむ、あれ媼おんな子こころ小せうかけられ、彼かれハ日ひか贈くわ世せいせ
 次つぎの冬ふゆ建文けんぶん二年に十月じゅうがつ夏なつの情なさけとまてせとて鎌倉かまくらへ遣つかせに、あま、さ
 二十七日にじゅうしちにち小端こはたあり、幕府まくふハ咫尺しせきとて通使つうしとよくまゐり、賢愚けんぐのく、差さ
 あれども人ひとを使つかふは必かならず方かたあり、役やくたが、る人ひといは、とさふ、い、つ、中なかと問とふハ、

井平せいへいふくく感佩かんぱい。敗鼓さいこの草くさをも貯たくわるハ便名医べんめいの用心ようしんあり。二年にま
 しく、親おやハ亦また良將りやうしやうの用心ようしんあり、と稱なまうせ、かせ丸まるハ愧かたじけて頻しばしば巡めぐる。
 當下たうげ高吉たかきち守直しうぢくハ齋さい一いつ主君しゅきみま、う、け、中なか。昨夜こふゆより此こゝ彼かと心こゝろを用もちひ、ま
 むハ、ま、その疲勞つかれのひけめ、媼おんな子こも早飯はやいひを勧めすすめ、みやといハ廣保ひろたか
 咄はなせ、うち、立たて、周しう公こう且かつの聖せいなるも、哺ほを吐はき、客きやくを迎むかへ、髪かみを握にぎり、ま、い、れ、
 況いは廣保ひろたか、この人ひとを得えたり。何なんぶ、疲勞つかれとあむべき、但ただ一いつ圓居えんぐハ入い奥おくく。
 饗きやう應おうと欠かふ、似にたり。早飯はやいひを勧めすすめ、と婢女めいよ們らハ傳つたへ、ま、い、れ、ま、あ、ま、
 相飯さうはんせん、汝なんぢ違ちがハ羅ら出でて、休やす息いきせ、と仰おほせ、この高吉たかきち守直しうぢく加世かせ丸まるハ唯ただま
 ちて退まり、厨くしや中なかも豫よて、ま、準備じゆんびして、ま、女おんな童どうま、ま、探盤たんぱんハ温湯ぬるま
 汲くみ入いり、ま、ま、賓主ひんしゆハ養齒やうしと勸すすむ、後のち小婢女せうめいよ們らハ、膳ぜんをりて、居ゐる
 ころ、井平せいへいま、ま、ま、辭讓じじやう、ま、席せき未まふ、ま、御食膳ごしぜん既すで果はる、婢女めいよ們らハ、

退さそ四下小人のさるびるぬ廣徳の折こそうけまて又并子と扱
 よも脅ふとのいとまうて向へまらぬ成問うた其許が鎌倉の執権ふ
 仕らる及下野ある足利へ追遣されて刀野時夏が家僕ふせれと又
 信友の為ふ罪人とありし正の藍玉院のおん物持小使へつくとて
 まらねどもその親の難といふと致さるべその進止をえて推せ野人
 西夫の子ゆわむと世々の憚るをありともこれゆの隠さるべゆあり
 名苦のへと正骨小向まて辛辛覚念とら笑とこの子向せぬはた
 おもあふやと上と豫てのさひひひと数あるねども某が父の樋口兼光
 木曾殿討たむひに兼光も亦誅らるこの時某僅ふ四歳乳母が乳
 養食とて十年あまらぬ近江小送り時政ぬ不邂逅して彼人ふ仕ふた
 始せりか如此とあり終せりか箇様とと媪子と名苦一得故とて

時政小侍と稱かたげあひる時夏が隠悪さ階中不演説しとて
 りやう某をて足利を愛顧せれ吉見冠者の蒲殿のおん子と
 又朝夷三郎義秀といひ猛者へ則鞠給ふ産らる和田殿の三男あり
 こ直も亦故ありて幼推され又不弁られ乳母が里小人とあれも将帥の
 器量あり実ふ文武の英才あり去るれふ某幸ふ友垣信ふと成りて送ふ
 素姓を告られども朝夷ぬと某といふも親族の軟びを漏らぬあは
 送ふいひがた親のふふれはあり殺の故さ士を愛し厄を故の仁心保
 かり彼二方も罪ありて今厄難の中ふありその往方とて定らるるあ
 圓居小録あるは遺憾くといひひくけて嘆息と廣徳もはくとて頻よ
 嗟嘆らその人を知らんとあふ且その友をよといふ古人の格言果さる
 これのま吉見朝夷を去るねども其許とて彼人をも亦雋傑あらんと

ちのへり。現堀口と今井と。鞠舎との兄弟。されば其許の朝夷が母も属する
 従才ある。それを送ふ若き。卒介小猶。一と兼光の木曾小後。且て
 降人となりて誅せられ。鞠舎の和田義盛。小再醮せり。かれの義男。勇士の
 為。少の親あがら。由愧。さ。んや。徒才といひぬ。その故。多。じ。を。れ。も。兼光も
 鞠舎も。當時武勇。小名高。難。小臨。て阿容。と。と。命。を。惜。む。の。の。末。あ。じ。
 鞠舎。と。ころ。の。志。あり。あ。け。且。て。兼光。が。降。系。の。清。水。尉。者。が。為。小。せ。一。飲。
 志。く。く。バ。蜀。漢。の。姜。伯。約。が。孤。忠。は。し。と。ど。か。く。兼光。討。て。そ。高。由。入。間。川
 少。害。せ。し。る。こ。も。亦。天。あり。命。を。傳。せ。く。堀口。次。郎。中。原。兼光。の。権。頭
 兼遠。が。子。となり。兼遠。の。信。濃。の。豪。家。世。も。志。れ。る。武。士。あり。た。木。曾。が
 兼兵。を。祀。せ。し。も。兼遠。又。子。が。羽。翼。小。う。け。り。和。殿。ハ。則。兼遠。が。孫。兼光。が
 子。と。い。ふ。ふ。ん。眼。も。と。と。あり。の。と。憑。り。た。壯。夫。あり。形。就。て。又。一。強。あり。女。見

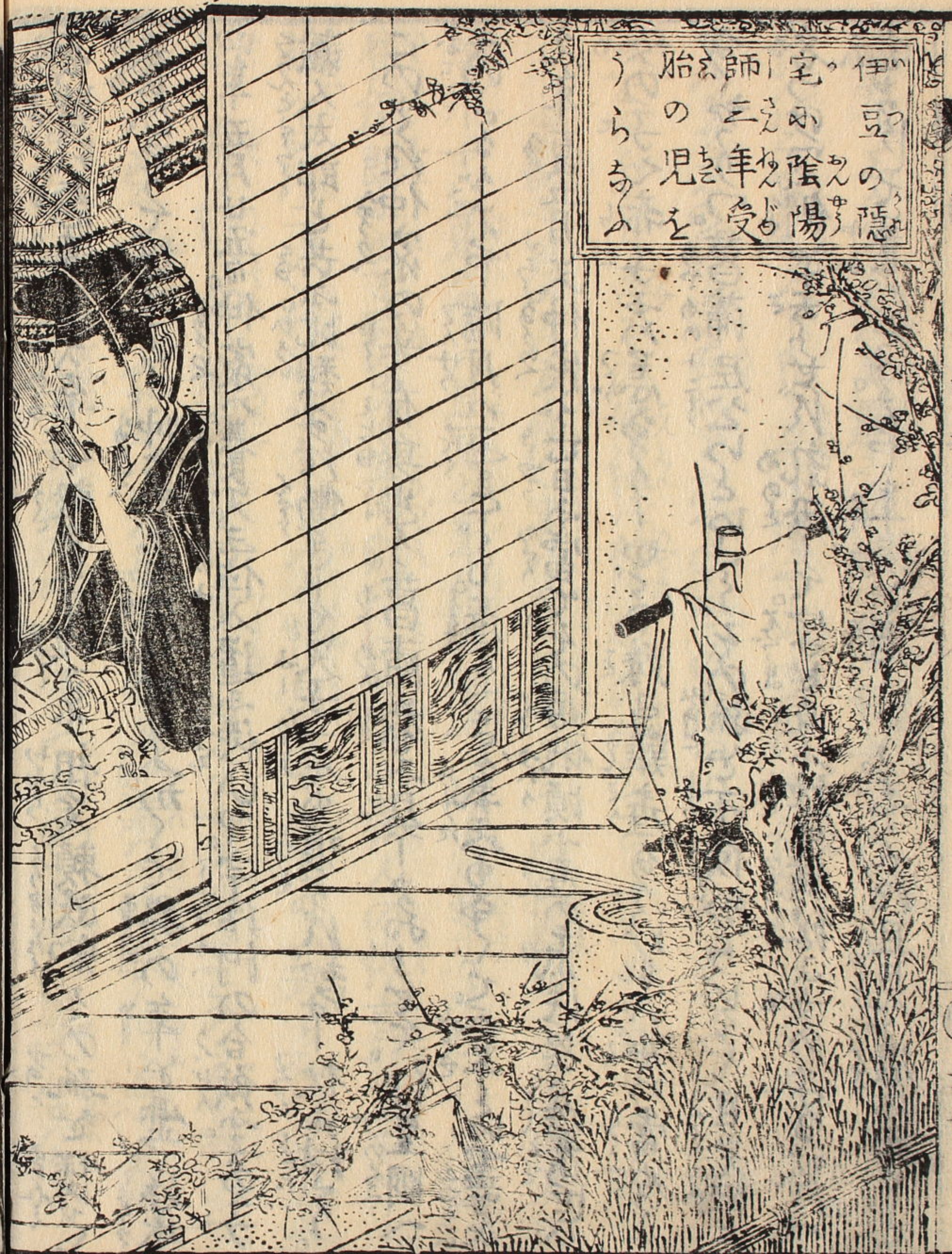
且見が。幸。あり。し。年。々。や。く。閑。ん。故。あり。て。い。ま。ご。婚。縁。と。り。結。ば。れ。
 嚮。小。れ。和。殿。を。試。つ。と。た。小。真。の。且。見。小。逢。せ。ね。も。その。名。い。え。や。知。ら。じ。
 一。日。亦。天。縁。あり。し。親。小。和。殿。小。女。見。を。妻。せ。欺。詐。ら。せ。る。密。諾。を。
 信。言。と。あ。さん。と。さ。し。入。り。つ。ま。ど。い。つ。て。并。卒。顔。赦。す。に。額。の。汗。を。推。拭。ひ。
 こ。の。心。ひ。ら。け。ゆ。る。れ。仰。を。承。り。ゆ。り。の。ね。君。ハ。正。く。源。家。の。嫡。子。世。を。憤。り。迹。を
 埋。め。て。鄙。の。田。舎。小。と。り。ま。せ。も。氏。貴。く。位。高。く。其。堀。口。小。子。と。い。ふ。も。原
 木。曾。の。老。黨。の。將。帥。と。り。士。卒。小。混。じ。夜。光。を。の。泥。中。小。擲。ん。り。
 い。と。情。か。げ。や。加。旃。某。ハ。慈。善。の。家。小。露。命。を。祭。る。今。ハ。形。餘。の。浮。流。人
 あり。と。や。同。輩。の。女。見。あり。も。妻。を。娶。る。と。さ。り。の。小。あ。ら。ん。ん。戲。ま。し。も
 夏。あ。そ。ら。れ。物。俵。は。と。怨。む。ん。ハ。閨。亮。哉。小。竊。聞。ぬ。ハ。菅。蒲。尼。公。ら。ち
 咬。ら。ら。梭。枝。小。紙。門。を。ひ。く。せ。て。徐。小。進。と。入。り。の。之。ハ。廣。保。ハ。忙。し。く。席。を。立。て

扶掖并卒由こま疾迎へ。裨の上居まわるとれば、按枝のみのころを
 引く。紙門を礎と引く。そがま内入るる。當下尼公ハ覚然
 并卒をせんかへん。やまの男子よ。この尼法師が年亦愧と忻に。と
 さをねころふ。按ひん。それゆ和殿を廣徳よ。くちりせん為あり。唯是
 佛の方便と。とひころて并せし。和殿の樋口兼光が一子であり。の滅且見が
 塔が。の望まう。人こし。襪の中より膝小居守育る。曾孫まれば佳
 塔欲得と豫て。より。おひらたあふ。ねども廣徳の故ありて。下し。受領せ
 辞せ。ころ。草あつた田舎あり。こまどと。り人もの。且見も亦情願あり。
 生涯人小帰せ。この尼が。また後。藍玉院の後住とも。ませ。め。と。り。ま。
 口鏡。こま。亦不便あり。より。や故あり。り。あり。とも。尚。未。ころ。た。未。通。女子。と。
 いろ。ころ。尼。ふ。せ。ころ。ま。ま。ぬ。か。う。ま。ぬ。ひ。不。樂。ころ。尼。が。ころ。疾。汲。ころ。ま。

廣徳の初より。和殿とまづく。試ころ。この人にと。ま。ハ。こそ。親の口から
 白地は婚縁。こま。深。ころ。ま。れ。ころ。疾。ま。海。推。辞。ま。え。ハ。人の信と。ま。め。め。ふ
 似。ころ。う。け。ころ。ま。と。叮。嚀。ふ。渝。ころ。ま。ハ。并。卒。ハ。席。と。避。て。類。と。り。ぬ。数。ま。ぬ
 牙と。ま。あ。り。白。ふ。か。ころ。殿。より。尼。君。の。塔。が。の。あ。と。ま。で。思。召。お。ん。慈。愛。ハ
 須弥多。海。低。く。大。洋。も。深。か。ころ。ま。下。より。疾。去。て。ハ。日。光。も。照。る。ぬ。并。卒。が。生。死
 ころ。ま。と。ころ。ち。任。せ。ま。ぬ。ハ。何。ぞ。推。辞。ま。ぬ。ん。ま。あ。れ。も。夫。婦。ハ。人の大。論。の
 その傳ふ。あ。ころ。ま。情。ふ。遍。ま。不。縁。の。基。致。只。り。遍。ま。ころ。ま。の。あ。り。い
 ころ。ま。の。あ。り。と。ん。ころ。ま。の。あ。り。と。ん。ころ。ま。の。あ。り。と。ん。ころ。ま。の。あ。り。と。ん。

才有り。志も容止美麗中て并平が類おあはれ今こそわれはに後迹
 のんこの君もふし。り。某が後おあつてふの婚縁を許しあつ。家の暇を
 のつてまのびくふ在如きたづひんこの後ひつくと信づちていへは尼公ハ
 頭せうちあり。否その婚縁の望かたは障るふふあつ。且見が妻池を
 十八と嚮ふいひの方便之實の今茲二十ふありぬ。和殿ふ一歳方とる奴
 系邦十八歳ありふ。且見と年紀由相志かたは整ふたれいふ。り。
 廣徳既ふ世を避るふ。浦敷の子を婿ふせふ。人の徳言むのふ。り。
 怒つた二つ。化を求るふ。いと恨自あて。理のふれ。并平ハ
 困。果て歎息と。廣徳ハこの氣及とて。や。媪子このふ。辭ひて。
 且見ハふ。女兒おて。實ハふ。女兒おあは。渠ハ六條藏人仲家か。送。腹子
 あり。仲家ハ帶刀先生義賢の嫡子にて。木曾義仲ハ為。六。兄あり。

義賢ハ悪源太系平小撃と。比。祖。又。頼政卿その孤を憐れ。
 養ひ。と。て。猶子と。仲家と。と。名。つ。け。の。ふ。か。て。縣。の。年。を。坐。て。流。承。
 四年五月廿五。仲家ハ養父三位入道。不。待。ひ。つ。宇治河の合戦。ふ。その。子。
 藏人太郎と。共。ふ。比。類。る。れ。働。さ。し。て。父。子。一。足。も。退。り。ば。お。さ。し。枕。よ。け。り。
 このと。仲家。の。妻。有。身。と。り。菖蒲。若。小。具。ま。お。と。せ。て。伊。豆。團。ハ
 流。る。ふ。か。た。や。臨。月。の。る。ま。ご。も。産。る。ふ。と。氣。及。も。争。て。三。年。と。い。ふ。壽。永
 元年夏五月。又。仲家。が。亡。日。ふ。當。て。その。母。俄。頃。ふ。産。の。氣。は。死。て。産。後。世。ハ
 女。の。子。と。赤。子。と。思。ふ。り。り。也。も。殊。に。難。産。あり。け。し。母。ハ。當。夜。よ
 ち。や。り。つ。菖。蒲。屋。公。い。と。い。ふ。その。孤。を。不。便。が。ら。せ。し。且。見。姫。と
 名。つ。け。つ。側。を。去。せ。ば。乳。母。して。字。せ。り。後。は。廣。徳。は。女。の。子。を。け。れ。ば。
 を。ま。り。して。養。ひ。と。り。と。や。年。來。を。過。し。と。志。ふ。に。且。見。が。腹。ふ。あり。と。



う 胎玄師宅伊
 ら の三々小豆
 あ 見年物陰の
 め を受も陽隠

三年ありの怪しとて屋公の竊し陰陽師小古せり。この子の成長の
 後家隸の妻ふあらん終焉の地定るあはれと正しくいひとられぬや。
 今更なりへ仲家が才ありたる木曾の殘黨并年。和殿小且見姫を。
 妻せんとて強まるるの彼ト並は符合せり。亦奇あふや。と正音は説示一
 かふふらん昔蒲屋公の酸鼻を仲家あり。且見あり。実の子。実の孫。
 異ありとて死考順をかりへん。世はあそもの老の宿願。小古かくま
 へよかるといひ姫を奉り。よん縁遠き叔父の木曾の二子と
 形ありとて屋公の屋公とといひつる。彼ト並の事さ。明地は説示一。
 二十ふあるカモ姫をせむせむ。あはれ小侯一婿が子を并平。和殿よりんよ。
 神ありぬりの雉うまふ。ま。且見あり。若ねども天録あり。睦死。
 夫婦の愛も想像る。その子を家臣は養せ。その女兒とて即黨小。

妻せむる世小多う。よりや和殿の北條ぬ不憎るるありとも。刀野小
 追々人ありとも。孫金の將軍家小弓を奪るる。咎あはね。蒲殿の
 子の貴して上小忌る。筋と異あり。廣保が婿小。そのも憚ることさ
 侍り。追捕の沙汰は後どとも。下よび屋が法衣の袖りて。捲ひ一
 人を出さんや。あはれはばうてあれ。とかりる。小流一の。并平鎮小
 驚嘆。又兼光が教。比某い。東西を辨せ。いひ。仲家
 朝臣の事。と。後小。厭小。びるの。細く。知。い。ひ。今。脱。る。
 路も。仰。小。隨。ひ。い。ん。鉄。さ。り。ま。が。婚。姻。ハ。い。そ。が。せ。り。ふ。る。あ。あ。は。れ。
 広保推禁め。媼子。そのいひ。ひ。み。公治長の篇を補。て。縷。の
 中。在。と。い。ふ。も。その。罪。小。あ。は。れ。と。その。子。を。以。妻。せ。り。聖。人。の。私。を。た。

心既小決せり。間中守直下河辺高吉ホホも。夏との秋か巨細た告つて
 二人ふたり小一人ひとり媒妁まいたくをせ近ちか於お吉日よひとトベ。且かつその日ひでて蓋ふた玉たま院いん侍しりて
 藤ふじ寝ねの疲つか勞らうをせ治ちよまららほらうや。と期ごをか推おてし結むすひかけらるる赤あか繩じゆ。
 出雲いづもの神かみの祈いのち為なるる。かくてな屋や公こうの堂どうといつつ四よつつらら女めの童どうと
 召め近ちかつつけけ。并なら平ひら湯ゆとい勸すすめめさせ。又また甲か表へ八はち表への物ものかかららにし時とき移うつてて午うまの
 見み少すくくく二ふた方かたままるる。夕ゆふ膳ぜんハハ居ゐるる。ああ下したせんとをを并なら平ひらをを洗すすひひて
 かかへへりりああひひぬ。

出雲の神の祈為る。かくて屋公の堂といつつ四つつら女
 の童と召近つつけ。并平湯と勧めさせ。又甲表八表の物か
 らに時移て午の見少くく二方まる。夕膳ハ居る。あ下せん
 とをを并平を洗ひてかへりあひぬ。

朝夷巡嶋記全傳第三編卷之一終

